

論文要旨

氏名 福西 大輔

論文題目 (外国語の場合は、和訳を併記すること。)

清正公信仰の研究 — 近世・近代の「人を神に祀る習俗」 —

論文要旨 (別様に記載すること)

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク (1枚) を併せて提出すること。
(氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。)

清正公信仰の研究 —近世・近代の「人を神に祀る習俗」—

清正公信仰とは戦国武将である加藤清正（1562—1611）を祀った信仰である。加藤清正は歴史上の人物であると同時に物語や伝説上の登場人物でもあり、信仰の対象でもある。

この清正公信仰を通して、本研究では民俗と歴史との関係を考えながら、日本人の「人を神に祀る習俗」は近世・近代にかけて、いかに変遷していったのか、日本人の神概念の再検討する。清正公信仰は、菅原道真を天満大自在天神、徳川家康を東照大権現として祀るような「人を神に祀る習俗」の中の一つとして捉えることができる。この「人を神に祀る習俗」は、この祖霊信仰と対立する側面を持つものである。祖霊は個性を失って神になったものであるが「人を神に祀る習俗」における神・人が神になったもの（人神）は、死して年月を経てもなお生前の個性（歴史）を持ち続けているものである。それゆえに人神信仰ともいわれる。言い換えれば、生前の個性を持ちながら神になったという点が大きな特徴の一つである。それゆえに「人を神に祀る習俗」の研究は祖霊信仰論を中心とした柳田國男の歴史観とは異なったものを導く可能性がある。

こうしたことをふまえ、近世から近代における「人を神に祀る習俗」の流れを押さえながら、清正公信仰の歴史の変遷や広がりを検討し、「中央」と「地方」との関係に注目しながら日本人の神概念を考えていきたい。その中で清正公信仰という一地域の信仰がどのようにして全国に広がっていったのか分析をしながら、「中央」と「地方」との関わりが人々の生活にどのような影響を与えたのか考えた。

小松和彦などの考えによれば、「人を神に祀る習俗」は怨霊や御霊である祟り神系と、権現などを含む「郷土」のために貢献した人を祀る顕彰神系に分けることができ、中世社会においては祟り神系であり、近世以降の社会になると顕彰神系に移行していたと考えられている。清正が死んだのが1611年であり、その直後に信仰がはじまったとするならば、定期的に清正公は顕彰神系の神となり、全国に広がったのは、謡曲などの芸能に原因があるということになる。

だが、圭室諦成は清正公信仰は祟り神系だとし、異論をとらえている。これに対して、池上尊義は祟り神の影響を否定した上で、日蓮宗の一派である肥後六条門流の庶民層への進出の過程に清正公信仰の発生の素地があり、庶民の信仰を背景にして本妙寺の祈禱寺としての性格が表面化し、元禄時代以降藩主祈禱所として祈禱所としての本妙寺が復活し、また藩主祈禱所たることが本妙寺ひいては清正廟の権威ともなり、清正公の神格化・清正公信仰が進展したものと考えている。このように先行研究をみても、清正公信仰は顕彰神系なのか、祟り神系なのかに関して結論が出ていない。その上、清正公信仰が時代を超えて均一に語られている傾向があり、時代による差は検討されてきていない。そこで、本論では、こうした点をふまえ、清正公信仰を受け入れてきた民衆の心意を時代の変遷に着目し検討していく。

清正公信仰は北海道から宮崎までほぼ全国で信仰されている。そして、第2次大戦前ま

では海外でも信仰は見られ、アメリカのハワイや韓国でも見られた。個人宅で祀られるものから寺社で祀られるものまで、その形態は多様である。そして、寺院で祀られる時は清正が熱心な日蓮宗信者だったということから日蓮宗寺院で祀られることが多い。桜井徳太郎が提案した民間信仰の構成に当てはめて考えてみると、清正公信仰は加藤清正の子孫にとってみれば「祖霊信仰・氏神祭祀」であり、領民にとってみれば「地域神信仰」になる。また、清正公信仰は日蓮宗との結びつきも強いので「外来信仰」の側面も見られる。清正公信仰が桜井の指摘する重層的な構成をしているといえよう。また、清正公信仰は複圈的構成になっている側面も見えてくる。「家内神」として祀る場合は「病除け・病平癒」「武運長久」「水難除け（河童除け・治水）」「商売繁盛」といった清正公の御利益を期待して個人で神棚などに祀るものが考えられ、「同族神」として祀る場合として加藤家ゆかりの人々の家で祀るものなどのケースがある。具体的には先に取上げた山形県酒田市で加藤清正の子・忠広の子孫だという家や職組で祀っている場合などが当てはまる。「土地神・地域神」として祀る場合は、貝洲加藤神社、妙行寺などが該当し、北海道江別市にある清正公を祀る江別神社でも地域の鎮守の神として信仰されている。このように清正公信仰が重層的構成かつ複圈的構成をし、多面的な側面をもっているのは、近世・近代を通じて清正公信仰が様々な形に変容してきたためなのではないのかと考えられる。

そこで文献資料・美術資料、そして民俗資料を使用し、時代ごとに考察した。その際、清正公の御利益の多様性に注目した。①「病除け・病平癒」②「武運長久」③「水難除け（河童除け・治水）」④「商売繁盛・芸事の向上」⑤「盗難除け」などが知られている。一方、清正公の祭礼は本妙寺などに代表されるように6月あるいは月遅れの7月24日の加藤清正の誕生日であり命日とされる日になされるものが多い。次いで5月5日に尚武の神ということから端午の節供との関連として覚林寺などでは祭礼がなされる。

清正公信仰の御利益の多様性は、時代によって、その信仰の御利益・祈願者を大きく変えてきたことによるものであった。言い換えれば、清正公を祀りながらも時代によって内容は全く異なった信仰であったと捉えることができる。それは同時に時代を反映した信仰だった。権現・流行神・軍神といった各時代を代表するような信仰と清正公信仰との繋がりが深かった。そこで、本論ではこうした信仰との繋がりに着目し、これまでほとんどわかっていなかった一地域の戦国大名に過ぎない加藤清正を祀る清正公信仰が全国各地に広がっていった時代ごとの背景を明らかにした。

まず、清正公信仰の成立の背景には、池上尊義らによる日蓮宗の一派である肥後六条門流の庶民層への進出過程に清正公信仰の発生素地があるという先行研究はあったものの、八幡信仰と豊国大明神や東照大権現といった、いわゆる権現信仰やその周辺の信仰の影響を強く受け成立していたことが新たにわかった。清正公信仰がはじまった当初は加藤清正所縁の者、具体的に言えば子孫や家臣、そして領民によって信仰される清正公を顕彰する信仰であったと考えられる。それゆえに熊本をはじめとする加藤清正の所縁の地のみで信仰されていた。

こうした信仰も庶民の現世利益を求める強い思いから清正公が流行神的な側面を持ち始めた。清正公200回忌を迎える1810年頃前から信仰は顕著となり、清正公を現世救済の神、

流行神として民衆が信仰するようになった。この時期に何故流行ったのかはこれまで理由が解明されていなかったが、清正公研究において、あまり着目されてこなかった『翁草』の記載を読み解くことにより、天変地異と権力への不満が背景にあることが明らかになった。1787年に起きた熊本城周辺の打ちこわしの際に清正公の霊が暴れたという噂があったことがわかった。その中で反権力の象徴として清正公は描かれていた。こうした時には、清正公信仰は御霊信仰的な側面も持つことがわかった。湯田栄弘らによって、これまで指摘されてきたような顕彰神としての清正公だけでは明確にできない側面を示した。

こうした清正公信仰を広げたのは、日蓮宗系の遊行宗教者やハンセン病患者などだという指摘はあったものの、具体性が乏しかった。清正公が前世で六十六部だったという伝承や各地の寺社の縁起から清正公信仰を広げた遊行の徒との繋がりを考察していくと、日延のような清正公信仰に大きな影響を与えた不受不施派の僧侶の存在を示唆することができ、清正公の病治癒の御利益を背景にハンセン病患者と本妙寺との繋がりも明らかになった。また、土木関係者や芸能関係者との繋がりもわかった。こうしたことにより加藤清正の子孫や家臣、そして、領民層だけでなく、広く民衆に親しまれ、関西・中部・関東まで広がっていった。こうした清正公信仰は、明治維新後の神仏分離令と西南戦争による清正公信仰関連寺社の焼失により一時的に衰退したと思われる。民衆の「病除け・病平癒」や「商売繁盛」などの現世利益の願いを叶えてくれる流行神としての清正公信仰の終焉をむかえたと考えられる。

近代以降の清正公信仰の研究はほとんどされてこなかったが、本研究では新聞記事などを通して、軍部との繋がりなどに注目しながら見てきた。熊本城に鎮台を置いたことや西南戦争によって本妙寺や加藤神社（錦山神社）が軍部と接触し、日清戦争の戦勝祈願を経て親密さを増した。日露戦争以後、乃木希典のような軍人によって武運長久の神として信仰され、軍国主義の高まりもあって清正公の軍神としての性格が国家により強調されていた。『尋常小学国語読本』（第3期国定国語読本）や新訂尋常小学唱歌などを通して、全国に清正公の軍神としてのイメージが広がる素地が作られていった。そうした中、清正公300回忌や325回忌などは軍人が関与しながら盛大になされた。本研究の中では、中でも本妙寺でなされた325回忌の銅像の建立という近代的な顕彰の仕方に着目した。昭和10年（1935）に「新興熊本大博覧會」にあわせて、長烏帽子型兜を被り、鎧姿で片鎌槍を持った姿の清正銅像が本妙寺に建立される。この銅像は、製作者・北村西望は当時軍人像を制作しており、その延長線上に清正公のイメージがあったと考えられた。その10年前、大正14年（1925）に開催された「熊本市三大事業記念国産共進會」の時に噴水の頂上に立像した清正像は、熊本で治水土木を指揮する温和な顔の着物姿で作られていた。

こうした清正公のイメージの変化にあわせるように昭和5年（1930）には本妙寺周辺でハンセン病患者の検挙がなされていた。5月16日午前7時に「参拝する篤信家の為」という理由で、本妙寺を包囲してハンセン病患者を收容した。7月28日には熊本市長を会長として本妙寺住職・門徒等が本妙寺一帯の浄化を目的に清正公奉誠会を結成し「患者駆逐」を行なうことを申し合わせた。この出来事は、近世から近代にかけて清正公信仰の担い手であったハンセン病患者たちを排除したというだけでなく、軍神としての姿をより明確にし

た。

そして、戦争も激化し、多くの人々が亡くなると英霊として各地の護国神社などで祀られるようになる。清正を祀る本妙寺でも祀られ、大本堂の左横には「弔皇軍将士之英霊」と刻まれた英霊供養塔が立てられる。英霊と軍神である清正公との結びつきを考えさせる。こうした動きは海外では早い時期に起きており、明治45年には清正公を祀るハワイのヒロ大神宮では、在郷軍人が忠魂碑を境内に建立し招魂祭を斎行し、大正4年(1915)には青島出征兵士犠牲者の慰霊を併せて行なった。第二次大戦中、加藤神社では「出兵兵士たちを送る人たちの武運長久を祈る姿が社頭では連日のように見受けられる光景となったのである」といわれている。覚林寺でも戦時中は出征兵士が多くやって来て、勝守りを受けて戦地へおもむいたといわれている。その一方、庶民には「弾除けの神」として信仰されるようになっていく。清正公の紋である蛇の目紋は丸く中がくりぬかれており、それゆえに弾が通り抜けるというものである。

このように時代によって信仰を変化させながら清正公信仰は広がった。この信仰の変化は「人を神に祀る習俗」に対する庶民の期待の変遷であった。それは御利益の変化、信者の変化に表れた。これらの変遷を読み解くことが民俗学における歴史理解だと考える。つまり、民俗を各時代の庶民が描いた歴史として捉えることにより、時代設定が可能になるのではなかろうか。具体的にいえば民俗事象の中に見られる歴史的な痕跡を追う、あるいは古文書の中に現在に続いている民俗事象を読みとることが考えられる。こうした作業により民俗学における歴史的な視点が生まれる。これまでいわれてきたような民俗学が追うべき課題である民俗の変化する側面を読み解くことができるのではなかろうか。

こうしたことをふまえると、清正公信仰は「中央」(近畿地方)で生まれた豊国信仰の影響を受け、熊本という「地方」で誕生した。それが再び江戸・東京という新たな「中央」にまで広がっていったものであると考えることができる。その背景には近世から近代へかけての社会体制の変化があった。いわゆる中央集権的体制の成立が原因として考えられる。

また、「地方」が「中央」といかに関わるかを考えた姿が人神の性格に影響を与えていくと考えられる。清正公信仰において、清正公の性格が時代によって変容することにそれは見られる。江戸時代、幕藩体制に不満を持った時、清正は反権力の象徴として姿を現し、近代になり、中央を守る「軍都」として熊本が発展していく時には軍人の理想的な英雄として姿を現している。

この事実は、柳田民俗学が圏論の中で展開してきたような新しい民俗が「中央」から生まれ、古い民俗が「地方」に残っており、そこから民俗の歴史的変遷を捉えるという考えと反するものである。清正公信仰は「地方」から「中央」へ新しい民俗を発信するものであった。

つまり、清正公信仰からみると「人を神に祀る習俗」は「中央」と「地方」との葛藤の歴史の中で生まれた信仰だと考えることができるのではなかろうか。

(福西 大輔)